1985年８月30日読売新聞

（第三種郵便物認可）　読売新聞　昭和60年（1985年）8月30日　（金曜日

在日朝鮮人〝差別と被爆〟

記録映画 長崎でロケ

差別と被爆という二重苦を背負わされた在日朝鮮人の体験を映像を通して訴える記録映画「アリランのうた」製作のため、女性監督らスタッフ七人が長崎市入り。二十九日、約二千五百人の朝鮮人徴用工が収容され、年内にも取り壊される元三菱造船所の「木鉢寮」（長崎市木鉢町）を撮影した。

制作者の朴さん（右）と映画の中で証言する徐さん

徴用工の苦難訴える

元三菱造船「木鉢寮」で撮影

監督は、在日二世の朝鮮人作家朴壽南（パク・スナム）さん(四九)（神奈川県茅ヶ崎市東海岸南五）。

被爆から四十年経過したが、強制的に祖国から連行され、過酷な労役に従事させられた朝鮮人徴用工の被爆体験や生活実態などについて記したものは少ない。このため、こうした辛苦を体験した朝鮮人が生きている間に彼らの苦難の実態を歴史に残しておこうと、映画製作を思い立った。

「アリランのうた」は二部構成で、第一部は広島が舞台。七月に現地ロケを行い、十一月中旬に上映予定。長崎、筑豊（福岡県）を紹介する第二部はこの日がクランクインで、四十年たった今も当時の面影を残す「木鉢寮」を撮影場所に選んだ。

年内に取り壊される木鉢寮

木鉢寮は当時、木のサクの囲いの中に収容棟八棟、食一棟、社宅二棟があったが、在二棟（木造二階建て）があり、老朽化が激しく、年内も取り壊される見通し。建の壁には、労役に耐えながら祖国への思いをつづった徴工たちの言葉が今も刻まれている。その文字や徴用工の言を織りまぜながら、朝鮮被爆者の「歴史」を紹介してく。

証言者の一人、徐正雨（ウ・ジョンウ）さん(五六)（崎市緑が丘）は「私は十四の時に強制連行されて来た労役と飢えで結核にかかりこれまでに受けた差別や苦みは言葉で言い尽くせるものではない。一人でも多くの人に私たち徴用工の実態を知ってもらいたい」と話している。

第二部は五十五分。長崎筑豊で約三か月間撮影をい、来年夏に上映の予定。